平成26年度

和漢薬・バイオテクノロジー受託研究報告書

研究代表者　富山大学　大学院医学薬学研究部長　細　谷　健　一

まえがき

富山県からの受託研究「和漢薬・バイオテクノロジー」において，本年度は３つの研究課題に取組みました。本報告書には，これら３つの研究課題に取組んだ３研究班（村口研究班，安東研究班，柴原研究班）の平成26年度の研究成果が述べられています。

以下，その研究内容と研究者を紹介します。

村口研究班の研究テーマは，「テーラーメード医療に資する抗体医薬・Ｔ細胞医薬創出のための基盤技術の開発」であり，本年度は，①Ｔ細胞 ISAAC の開発（村口篤氏），②がん特異的Ｔ細胞検出システムの改良（小林栄治氏），③Ｔ細胞抗原探索システムの開発（岸裕幸氏），④ウサギ ISAAC を用いた抗体開発（小澤龍彦氏）について，各氏の研究成果を報告しています。

安東研究班の研究テーマは，「芍薬成分ペオニフロリンによる末梢神経障害改善効果とペオニフロリン含有外用薬の開発」であり，本年度は，①動物モデルを用いた芍薬成分ペオニフロリンによる末梢神経障害改善効果の検討とペオニフロリン含有外用薬の開発の前臨床試験（安東嗣修氏），②抗癌薬投与患者の末梢神経障害に対する芍薬甘草湯並びに芍薬成分ペオニフロリン含有外用薬の臨床試験（齋藤滋氏）について，各氏の研究成果を報告しています。

柴原研究班の研究テーマは，「『富山県ブランド芍薬』の基盤・臨床研究」であり，本年度は，①富山県産芍薬の品質評価にかかる臨床研究（柴原直利氏），②シャクヤク品種の選品と加工法の最適化に関する研究（小松かつ子氏）について，各氏の研究成果を紹介しています。

これらの成果が，現場において活かされるまでには時間が必要と考えられますが，これらの基礎的研究における大学の知の創造と蓄積の成果が，現場の方々に学問的立場からの示唆を与え，やがて応用されていくことを，長い目で見守りたいと思います。そして，このような幅広い和漢薬やバイオテクノロジーの研究成果が，広く県薬業界にも還元され，その活性化につながることを期待します。

最後になりましたが，本研究の実施にあたり，絶大なご支援を頂いた富山県関係機関に深く感謝申し上げます。